

詩編 119 : 105～112

ルカによる福音書 11 : 33～36

「ともし火」

<人の子のしるし>

前回の聖書の箇所(11:27～32)は、イエスさまに対して「天からのしるし」が欲しい、という人々。つまり、イエスさまが神から遣わされた救い主であるということ、自分が信じられるように、そのことを証明するような、超自然的な奇跡を見せて欲しい。自分の納得できる「天からのしるし」を示してくれたなら、イエスさまを信じて良い。そう主張する人々に、イエスさまがお答えになったことを聞きました。

イエスさまは、人々が神さまに対して、自分の望み通りの救いを求めたり、自分が信じるためにその力を試すようなことは、よこしまだ、と仰いました。

そして、そういう人々が求めるような、自分たちの思いを満たすために求めるような、「天のしるし」は与えられない。人々に与えられるのは、「ヨナのしるし」のような「人の子のしるし」。つまり、イエスさまが語る神の言葉である。それこそが、神さまの救いのしるし、イエスさまが救い主であることを指し示すしるしである。そう語られたのです。

イエスさまの御言葉は、どんなに驚くような奇跡にもまさる、これまで語られたどんな言葉にもまさる、これ以上のしるしはない、という「しるし」です。

それが今、人々の目の前で、神の御子イエスさまご自身の言葉で、神さまのご支配が来たということが語られている。その神のご支配を実現して下さる、神の力を持つ方が、今まさにここにいて、語っておられるのです。

この神の言葉を聞いて、神さまの救い、イエスさまを受け入れる人は、最も幸いな人である。しかし、聞いても受け入れようとしない今の時代の者たちは、よこしまだ。悪い。

そうイエスさまは語られました。

そして、今日の聖書の箇所はこの話を受けて、「人の子のしるし」、つまり、イエスさまの神の言葉と、それを聞いた人々の態度のことが、「ともし火」のたとえで語られているのです。

<燭台の上に置かれたともし火>

さて、まず 33 節には「ともし火をともし、それを穴蔵の中や、升の下に置く者はいない。入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く。」とあります。

この「ともし火」は、イエスさまが語られる「神の言葉」です。救いを告げる、神の支配

を告げる、その御言葉のことです。それは救いの知らせであり、イエスさまご自身であり、また神さまの愛そのものでもあります。

天の父なる神さまは、この「神の言葉」、つまり、ご自分の御子であるイエスさまを、罪と死に支配された暗いこの世に、わたしたちを救い出すために、遣わして下さいました。

そして今、この神の言葉、ともし火は、人々の目の前に、わたしたちの目の前に、置かれています。暗闇を照らすために、燭台の上に置かれています。神の御子イエスさまは、世に来られ、神のご支配を告げておられる。暗闇の中にいる人が、ともし火の光を見て、明るさを得るように、世のすべての人々が、イエスさまによって罪と死から救われ、神さまのご支配に生きる恵みに与るためです。

<体のともし火は目>

そしてイエスさまは 34 節で、ともし火の光に照らされるわたしたち、神さまの恵みを受け取るわたしたちのことを語っておられるのです。

「あなたの体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい、濁っていても、体も暗い。」

イエスさまは、わたしたちが、ともし火の光を見て、その明るさを得るためには、どういう「目」であるかが大切だ、と仰っています。

それは、神の言葉を聞いて、救いの恵みに与るためには、わたしたちには何が大切か、ということなのです。

ともし火は燭台の上に置かれています。光は、わたしたちを照らしています。

そして、「目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい」と言われています。

この「澄んでいる」という言葉は、直訳すると、単純、純粹、正直、惜しみない、という意味の言葉です。単純な目。つまり、ものごとをそのまま純粹に見つめる、まっすぐひとすじに見つめる目、ということでしょう。他のモノを見たり、二重に見えたり、自分の見たいものだけを見る目ではなく、目の前にあるものを素直に受けて映し、まっすぐに見つめる目。

この目を持っているのであれば、「あなたの全身が明るい。」澄んだ目は、燭台の上に置かれたともし火をただ見つめ、自分を照らす光をただ素直に、純粹に受け取って、わたしという存在全体に光を認知させます。そして、自分の体のすべてが、存在のすべてが、今まさにともし火の光に照らされていること、明るさの只中であることを、知ることが出来るのです。

燭台に置かれたともし火の光を、素直に、単純にそのまま受け止め、その光を取り込む「澄んだ目」こそが、わたしたちの「全身」、つまりわたしの存在そのものが、明るさの中に置かれていることを教えてくれるのです。

しかし、目が「濁っていても、体も暗い」のです。

この「濁る」という言葉は、前回の聖書箇所 11 : 29 にあった「今の時代の者たちはよこしまだ」と言われていた、この「よこしま」と同じ言葉です。これは、「悪い」という言

葉です。「目が悪ければ、体も暗い」。

見るべきものが見えない、悪い目。ともし火が目の前にあるのに、これを見ない目。ともし火を見つめない、光を受け付けない目。それだと、体も暗い。あなたの体のすべて、存在のすべてが、光に照らされず、暗いままである。そう言われているのです。

燭台の上にともし火が置かれていても、光が闇を照らし、明るくしていても、それを見る者が、その光に目を向けて、まぶたを開き、光を受け止めなければ、その明るさを享受することは出来ません。顔をそむけて、目を閉じて、そのともし火の光を自ら遮断するなら、その明るさを知ることは出来ないのです。

<調べなさい>

だから、イエスさまはわたしたちに問うておられます。35 節で、イエスさまは命じられました。「だから、あなたの中にある光が消えていないか調べなさい。」

あなたのその目は、燭台の上に置かれた、目の前のともし火を、見つめているか。その光をあなたの目はまっすぐ見つめて、受け取っているか。あなたは、自分という存在が、光に照らされていることを、明るさの中に置かれていることを、知っているか。

それは、言い換えれば、神の言葉を聞いたあなたは、それを素直に受け入れるか。イエスさまの救いを受け入れるか。神の恵みの中に置かれていることを信じるか。そう問われているのです。

わたしたちの目は、どうでしょうか。目の前に置かれたともし火を、目を開けて、素直に見つめようとしているでしょうか。神の言葉を、素直に聞こうとしているでしょうか。差し出された救いを、受け取ろうとしているでしょうか。

燭台の上のともし火は、すでにわたしを優しく、明るく照らしているのに、「いいや、本当にともし火があるかどうか信じられない。それが明るいかわからない。それを信じるための証拠を出せ。」そんな風に疑って、顔を背けて、目を閉じて、光を拒否していないでしょうか。

先週の聖書箇所で、イエスさまに対して、救い主であることを証明するような証拠を出せと試した人々は、まさにこの「濁った目」、悪い目の人々なのです。

今、目の前に神に遣わされた御子イエスさまがおられる。罪から救うと言って下さっている。神さまの恵みのご支配に招いて下さっている。それを見ている。聞いている。

なのに、素直に受け入れない。単純に受け取ることが出来ない。自分の頑固さによって疑いを持ち、目を瞑り、あらぬ方向へ顔を向け、今、目の前に差し出されている神さまの救いを、神の言葉を、救い主イエスさまを、拒否しているのです。

そうすると、恵みの光を見つめることが出来ません。明るさを知ることは出来ません。明るい光の中へと招かれているのに、自ら暗い中にとどまろうとしているのです。

あなたの体は明るい。目が濁って、あなたの中の光が消えていないか。神の言葉を素直に受け入れているか。神があなたを愛しているという言葉、罪から救うというその知らせを、あなたは素直に聞いて、神の恵みの中に生きようとしているか。

そう、イエスさまは問うておられるのです。

#### <外からの光>

わたしたちを明るく照らす光を、燭台に置かれたともし火の光を、わたしたちは澄んだ目で、受け止めなければなりません。そうして初めて、自分が光に照らされていること、自分の体全身が、明るいところに存在しているのだと分かるのです。

ともし火の光は、外からわたしたちを照らします。そして、その光を澄んだ目で受け止め、明るい光の中を、この体で歩いて行くのです。

それはつまり、わたしたちは自分で自分を明るく照らすことは出来ないということです。わたしたちは自分の内には、光を持っていないのです。自分の中から生み出される希望や、喜び、幸せ、あるいは信念などは、自分の人生を照らすことは出来ないし、環境や、苦しみや、挫折、さまざまな出来事によって、簡単に消えてしまう光です。

どんな苦しみの中でも、悲しみの中でも、困難の中でも、たとえ死と向かい合わせになっても、決して消えることのない光は、ただ外から、神さまから照らされる光だけなのです。

それこそ、神さまの御言葉です。それは、神さまがあなたを愛しているという言葉であり、あなたを罪と死から救うという言葉であり、このわたしのために苦しみを受け、十字架に架けられて死に、そして復活なされた、イエスさまご自身のことなのです。

ここに、外からの決して消えない光、わたしたちがどんな暗闇にいても、深く差し込んできて照らして下さる、救いの光があるのです。

イエスさまは、それを見つめるように。目を素直に開いて、澄んだ目で、光をただ受け止めるように。神の言葉を聞いて、ただ信じ、受け入れるように。そうすれば、あなたの全身、あなたの存在、人生、命、すべてが明るい。あなたのすべてが、神さまの恵みの中に置かれるのだ。そう語って下さっているのです。

#### <求めなさい>

わたしたちは、澄んだ目を持ちたいと願います。神さまの救いの恵みを素直に受け取りたいと思います。

しかし、わたしたちは思うのです。自分の目は濁っているのではない。光を映すことの出来ない、よこしまな、悪い目なのではないか。神さまを疑ったり、あるいは試したりして、素直に恵みを受け取らず、むしろ遠ざかっているのではないか。どうやったら、この目を澄んだ目にすることが出来るのだろうか。

ここで、わたしたちは、今日の箇所が含まれている、ルカによる福音書 11 章で、初めに

イエスさまが「主の祈り」を教えて下さったこと、そして9節以下で語って下さったことを思い起こしたいのです。

「そこで、わたしは言うておく。求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。あなたがたの中に、魚を欲しがると子供に、魚の代わりに蛇を与える父親がいるだろうか。また、卵を欲しがるとに、さそりを与える父親がいるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」

「求めなさい。そうすれば、与えられる。」イエスさまはそう約束して下さいました。

「まして天の父は求める者に聖霊を与えて下さる。」イエスさまはそう言って下さいました。

わたしたちに神の言葉を聞かせ、受け取らせ、信仰を与え、祈りへと導いて下さる聖霊を、あなたの天の父が、与えて下さる。あなたを愛し、憐み、もっとも良い物を与えようとして下さる父なる神が、求めるあなたに、聖霊を与えて下さる。イエスさまはそう教えて下さいました。

わたしたちは求めましょう。天の父なる神さまに、祈りましょう。

イエスさまは御自分の命によって、わたしたちの罪のために架けられる十字架の死によって、わたしたちが神の子とされ、父なる神に信頼して、安心して祈ることが出来るようにして下さいました。天の父なる神さまは、聖霊を与えて下さるでしょう。澄んだ目を与えて下さり、御言葉を受け取らせて下さるでしょう。信仰を与え、また守って下さるでしょう。

わたしたちは、そうして、神の言葉に照らされて、恵みの光の中を、歩んでいくことが出来るのです。

<あなたの全身は輝いている>

しかも、イエスさまは36節の最後で、そうして神さまの御言葉の光を受けて、明るく照らされて歩むわたしたちもまた、「全身は輝いている」と言って下さいました。

自分の中からは生まれぬ、外から与えられた光。決して消えることのない確かな光を、わたしたちが見つめ、受け入れ、明るく照らされることで、わたしの全身が輝くというのです。わたしたち一人一人が、神さまの御言葉を聞き、イエスさまの救いを受け入れ、恵みの中を歩むことで、わたしたちの歩みそのもの、存在そのものが、神さまの光によって輝かされるのです。

そしてその輝きは、世の人々、罪と死に苦しむ人々を、まことの光へ導く助けになることが出来るのです。わたしたちが、受けた光を輝かせて、このまことの光のもとへ、神さまの御言葉のもとへ、人々を招くことが出来るのです。

この壮大な救いのご計画が、神さまの恵みが、今すでに、わたしたちに語られ、照らされ、満ちているのです。光を受け入れる澄んだ目を持つことが出来るように。そして、光を受け

たわたしたち自身も輝いて、人々に神さまの光を知らせる者となることが出来るように。  
聖霊を、祈り求めましょう。

【お祈り】

天の父なる神さま

罪と死の暗い闇の底にいたわたしたちに、神の言葉を与えて下さり、イエスさまの救いを  
与えて下さり、恵みの光で照らして下さったことを、心から感謝いたします。

しかし、わたしたちの目はよこしまで、素直に、燭台の上に置かれたともし火を見つめる  
ことが出来ません。疑い深い、頑なな心で、あなたを試そうとするような者であることをお  
ゆるし下さい。

どうか、わたしたちに澄んだ目を与えて下さい。聖霊を与えて下さい。語られた神の言葉  
を素直に聞き、イエスさまの救いを素直に見つめ、御前にひざまずいて、感謝して、喜んで、  
恵みを受け取る者として下さい。

そして、あなたの恵みのご支配の中で生かされているわたしたちが、この喜びを、幸いを、  
隣人に伝える者とならせて下さい。いただいた光で、わたしたちもまた、暗いところにいる  
方たちに、明かりを届けることが出来ますように。

このお祈りを、イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン